

# 城山三郎『大義の末』

坂口 博

城山三郎（一九二七・八・一八～二〇〇七・三・二二）の小説第一作は『生命の歌』（『近代批評』第7号、56・12）だった。このなかに広島の「きのこ雲」を描いた箇所がある。

八月六日

朝の課業始めがあつて間もなく、突然、雷が七、八つ一時に落ちたような青白い閃光、そして震動が来た。兵舎を飛び出ると、西の方、広島方向の山の肩に、白い雲が一つ浮いていた。それは白金色に輝きながら、奔騰し、みるみる巨大な雲塊となつて、白く泡立つ両翼を空一杯にのばして行つた。火薬庫の爆発か、発電所の被爆だろうとも言う。（引用は『生命の歌——戦争と組織——』＝光文社、77・9＝所収による）

写真や米軍撮影の戦果記録映像を通して、私達にも既視感を与えておられる「きのこ雲」の姿である。原爆＝きのこ雲といつても過言でないほど、その印象は強い。

しかし、これは飽くまで傍観者や加害者の視線である。爆心地からの距離にもよるが、直接の被爆当事者は、果たして「きのこ雲」を見たのだろうか。その雲の下では、「巨大な雲塊となつて、白く泡立つ両翼を空一杯にのばして」いく形状を認識することが、

果たして可能であつたろうか。もつとも、爆心地近くで、瞬時にして殺された多数の人々は、雲を見る暇もない。

あらためて言うまでもない、この事柄を教えるのは、各地の名所鳥瞰図絵（パノラマ地図）で知られる吉田初三郎（一八八四～一九五五）が描いた「原爆投下の瞬間」である。広島図書の依頼で、一九四六年に現地を訪ね、数百名の被爆者に取材した上で仕上げたという。「被爆直前の広島」等の八点とともに、同年に刊行された英文グラフ誌「HIROSHIMA」に発表されたものだが、「瞬間」の再現とはいえ、従来の「きのこ雲」とはまったく違った形状が描かれた。そもそもこと盛り上がりしていく様相は、黄金色の薄い円上に盛られた満開の桜花のようでもあり、何とも不思議な印象を与える。有体に言えば、色彩豊かに美しく描かれているのだ。これも、おそらく原爆のもたらした一つの世界として受容されるだろう。

鳥瞰図の常として、仮設された中空の視点から広島市街地を描写するのだが、緑の見える土地は、ほとんどが黄金色に覆われる。これは瞬時に拡がった炎をイメージしたものと思われる。次の「炎上・その日の夕暮れ」とあわせて、「被爆直前」と対照できる構成となつた。被爆前後の広島商工奨励館（原爆ドーム）も別個に描かれている。なお、「瞬間」には、B29の機影もしつかり入っている。

英文グラフ誌「HIROSHIMA」は、北九州市立自然史・歴史博物館（いのちのたび博物館）で二〇〇八年一〇～一月に開催された「美しき九州の旅——「大正広重」初三郎がえがくモダン紀行——」展に、出品されていた。まだ、現物の入手はかなわずにいる。同展の図録は、益田啓一郎編『美しき九州』（海鳥社、09・

2) と改題された上、一般書に衣替えして刊行されている。このなかに、これらの絵はカラーカードで収録された。

原爆を「きのこ雲」でない雲によつても受容したいと思うのは、その肉体的存在までもが一瞬にして消滅した人々を含めた被爆者の視点を、もちろん同じ位置に立つことなど、絶対に不可能なこととわかつていながら、再現していきたいと願うからである。

さて、城山三郎は「大義の末」でも、まったく同じ光景を描く。

横顔を向けた森に、あえぐように話しかけようとしたとき、山峡の空気をふるわせてサインが鳴り出した。警戒警報である。柿見と森は身をまるめ、ころげるよう坂道を駆け下りて行つた。

兵舎に飛びこんだとたん、雷が七つ八つ一時に落ちたような青白い閃光、そして震動が来た。西の方、広島方面の山の肩に、白い雲が一つ浮いていた。それは白金色に輝きながら奔騰し、みるみる巨大な雲塊となつて、白く泡立つ両翼を空いっぱいにのばして行つた。(引用は『戦争文学全集』第6巻

||毎日新聞社、72・3||所収による)

支那事変当初の壮烈な戦死によつて、軍神と崇め祀られた杉本五郎中佐(一九〇〇・五・二十五・三七・九・一四)の遺著「大義」(平凡社、38・5)をバイブルのようにして育つた軍国少年たちを描いた「大義の末」(初刊は五月書房59・1)は、志願した海軍予科練習生の訓練場面に關して、「生命の歌」を下敷きとしている。訓練中の過失によつて友人を死に至らせる過程を、「生命の歌」では日記体で綴る。一九四五年四月六日に入隊した海軍の所属は、「大竹海兵团第二十三分隊」となつており、広島市西南の方角に

あたる海に面した大竹市から、七月二日に軍用列車で呉まで、あとは行軍によつて「呉と広島を底辺とする三角形の頂点のような位置、黒瀬川沿いの山峡にある」「海軍砲術学校郷原分遣隊」へと移動する。確かに呉市郷原からは広島市中心部は西方にあたる。後に、佐高信との「週刊読書人」(55・11・4、第二六一一号)掲載の対談「あの頃のことを忘れるな」では、次のように回想している。

佐高 呉と広島の中間に在る基地で原爆に遭うんですね。

城山 そうですね。ある日「あの日」の誤植か、学科をしている時に、いっぺんに雷が十くらい落ちたような光と音があつたんです。海軍は沈着冷静と言つてゐるのに、その音にびっくりして真つ先に教官が飛び出て行つちやつた。その次の日に海軍の上の方から「あの落ちた爆弾は光線を利用する爆弾だから明日から真つ白な服を着ろ、これでの爆弾は防げる」という連絡があつた。

佐高 原爆の話ですかね。

城山 そうです。村を歩いているとおばさんが寄つてきて、「兵隊さん仇とつてよ、うちの息子広島で殺された」と言つんですね。こつちは白い服さえ着ていればあんなもの恐くないと思つてゐるから何がどうなつてゐるかわからないんですよ。海軍の末期はかなりひどかつた。

佐高 海軍と陸軍は仲が悪くて、広島に原爆が落された時に城山さん達海軍は救援に行かなくて済んだんですよ。城山 海軍は「広島は陸軍の都だ、海軍は行く必要はない」と言うので、行かなくて命拾いしたんですよ。

「生命の歌」は、敗戦直後の八月二三日、治安の乱れた呉市内警備のために出動する場面で終え、原爆 자체やその被害については触れない。「大義の末」には、前記対談で触れた様相も出てくる。

練習生たちは、みな白い服装をつけていた。種村の死んだ朝、広島に落ちた新型爆弾が光線を利用するものと分つてから、国防色の服装はすてられ、略帽からズックの編上靴にいたるまで、白一色が用いられることになった。日中の警報では、暑さの中に白い軍手をはめ、首すじから頬へ白布をたらした。光線さえ避けなければ、爆弾の威力は半減するというのだ。白衣を着て横穴壕へ／防空總本部第三次発表／新型爆弾への対策」（朝日新聞（東京本社版）45.8.12）といった政府の一般庶民への呼び掛けは、もともと白色の軍装の多い海軍では、さらには徹底されたものと見える。これも、後日の視点からすれば、陸海軍の確執同様に、滑稽さを超えた光景と映らざるを得まい。

「大義の末」が「生命の歌」と大きく違うのは、「大義」にこだわる敗戦後の元「少年」を描いたことである。天皇制にも関わるこの主題は、「原爆展」を介して象徴的に語られている。

復員後、「東京都下T町」に所在する「旧制H高校」に進学した柿見は、昭和天皇を「天ちゃん」、皇后を「おふくろ」、皇太子（現在の天皇）をセガレと呼び捨てる先輩や友人たちに衝撃を受ける。学園祭に皇太子が突然来校することになり、左翼学生を中心に「セガレの来校を拒否しよう。セガレを入れるな。赤旗で竹矢來をつくろう！」と呼びかける。一九四九年当時の出来事である。

H高校を経て、柿見は京都K大へ、友人の森は東京T大へ進んでいた。まず事件はT大五月祭で起こる。小説時間では一九五〇

年五月のこととなる。「原爆展をやつてた。その入口へ来てセガレが『こんなつまらぬものは見ない』と云つたんだ」。この波紋はK大の「天皇行幸」に及ぶ。

学園祭をはさんで市民に公開の予定であつた原爆展は、学生たちが願い出でた部屋の使用を拒否され、予定通りの開催ができなくなつた。T大の原爆展で、皇太子は、つまらぬものは見ないと云つた。森からそれを聞いて間もない今、K大では天皇行幸のために原爆展そのものが開催できなくなつたのだ。皇太子と天皇の父子が原爆展を忌避することですつきり一筋に連らなつたことが柿見には悲しかつた。あの少年がそんなことを云う筈はない。その父の天皇もまた……。天皇父子にこうした態度をとさせているにちがいない一つの組織が、はじめておぼるに感じられた。それは、もはや存在してはならぬもの、幻影すら現われてはならぬ組織ではなかつたか。

T大が東京大学、K大が京都大学をモデルにしていることは指摘するまでもない。五月祭事件はまだ確認できないが、天皇裕仁へ公開質問状を出した京都大学の事件は、一九五一年一月二日のじきいの出来事をベースにしている。「我々は勿論かつての貴方の責任を許しはしないけれどそれよりも、なお一層貴方が同じあやまちをくり返さないことを望みます。そのために私達は貴方が退位され、天皇制が廃止されることをのぞむのですが、貴方自身それを望まれぬとしても少くとも一人の人間として憲法によつて貴方に象徴されている人間達の叫びに耳をかたむけ、私たちの質問に人間として答えていたゞくことを希望するのです」の文言は、一部を読みやすくしたかたちで、そのまま使われる。

質問は五箇条にまとめられる。小説では、そのうちの、第一戦争事態に際して拒否を世界に訴えるか、第二日本の再軍備拒否を呼びかけるか、第三京都行幸に伴う市民の自由制限と空費を希望するか、の項目が全文引用された。「質問の第四にはK大来校の目的が、第五には原爆展への関心が問われていた」。その第五は次のようだつた。

広島、長崎の原爆の悲惨は貴方も終戦の詔書で強調されました。その事は私たちは全く同意見で、それを世界に徹底させるために原爆展を制作しましたが、その開催が貴方の来学を理由として妨碍されています。貴方はそれを希望されてしまうか。又私たちはとくに貴方にそれを見ていたゞいたいと思いますが見ていたゞけるでしようか。(『昭和二万日の全記録』第9巻)〔講談社、89・5より〕

もちろん、この事件の契機は「原爆展」ではなく、「天皇行幸(巡幸)」そのものが持つ政治的意図にあつた。全学自治会である「京都大学同学会」による画期的な「公開質問状」は、大学当局に対する真摯な働きかけにもかかわらず、一方的に拒否された。その上、天皇来学の際の混乱によつて、同学会は解散させられ、学生の処分まで出している。この公開質問状の起草者は中岡哲郎だつたといつう。

なお、城山三郎は小説の前には数十篇の詩も書いていた。加藤仁『城山三郎伝 筆に限りなし』(講談社、09・3)には、一九五二年頃の作品「叙事詩 夏草の祈り」一篇が、全文紹介されている。作家・城山三郎の出発点であるが、そこにも原爆は出でている。

(前略)

突然「ぐわあん」と地がゆれ  
恐ろしい閃光が目を縫つて  
はげしく雲が噴き上つた

一日して軍司令官命令

「新型爆弾は光熱利用なれば  
白装すれば恐るゝに足りない」  
理性では考えられない事が  
又しても命ぜられ、信ぜられた。

白い戦斗帽、白服、白ゲートル、白靴、白手袋、

目だけを暗く光らせて

当たりもしない高射砲につき

川を「ほふく」で渡らされた

その時だつた

半狂乱の老婆が飛び出し

「ヒロシマ」の帰らぬ息子を、

夕陽を浴びて映えてゐる山一つ向ふで

悪臭を発して全市民が

苦しみ、のた打つてゐる様を

泣きわめきつゝ訴えたのだ

(後略)

最後は「母を泣かせ、老婆を狂わせ／世界中を泣かせる恐ろしい悪夢を、／二度と繰り返してはならないのだ」で結ばれている。